様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　21 日現在

機関番号：22401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：21592814
研究課題名（和文）親のケア能力、子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育・指導力の形成
研究課題名（英文）Empowering nurses for leadership and educational support for children’s self-care and parenting caring abilities
研究代表者
添田　啓子（SOEDA　KEIKO）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
研究者番号：70258903

研究成果の概要（和文）：
地域小児医療中核施設にオレムセルフケア不足理論に基づく教育介入を実施、延べ参加者数1,265 名（全看護師数の約 4 倍）。介入成果物として、理論の理解から看護過程の組織展開に向けた記録様式・作成ガイド・標準看護計画（89 件）等が作成され今後電子化予定。標準看護計画は疾患中心の問題志向型から子ども･家族のセルフケア/ケア能力獲得へ向けた支援へ変化し、看護師主体の計画から子ども・家族中心の支援へ変化した。
研究成果の概要（英文）：
A total of 1,265 nurses, roughly quadrupling the number or nurses available at the center of a medical institute for children used educational intervention to transform Orem’s self-care deficit theory into clinical practice.
Interventional outcomes are changes in record formats, a guide for nursing plans, and standard nursing care plans (89 totals) that help to understand and develop nursing process based on Orem’s theory. End results are still being developed for the usage of electronic charts of the theory based nursing care plans.
Focus on the standard nursing care plan varied from problems stemming from disease to the needs in self-care for children and their families. Standard nursing care plans changed into plans that now support children and their families with self-care.

交付決定額　（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：セルフケア能力、ケア能力、オレムセルフケア不足看護理論、組織的教育介入、看護師の教育・指導力、看護の質向上、家族参画、小児看護

１．研究開始当初の背景

少子化・核家族化の進行による親のケア能力の低下が問題となっている。また、入院期間の短縮により、医療的ケアの必要な状態での退院が増加している。これらから、親のケア能力・子どものセルフケア能力を高めることが必要であり、看護師が親のケア能力・子どものセルフケア能力を支援する教育・指導力を形成することが重要となっている。

この研究は地域小児医療中核施設において、『親のケア能力、子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育・指導力形成のための組織的な教育介入』を行い、その効果を明らかにすることを目的としたもので

ある。教育介入は施設と大学研究者らの合同プロジェクトで行い、データ収集・分析は、主に大学側が行った。

オレムはセルフケアを人が日常生活の中で生命や健康を維持し安心感を継続するため、自分自身行なう活動で人はこれを学習して意図的に行なうと述べた。小児看護では子どものセルフケア能力発達に合わせて親がケアを補うため、親と子をユニットとしてとらえる。親のケア能力・子どものセルフケア能力が不足している場合、看護師はこの能力獲得を支援する。セルフケア/ケア能力獲得には、必要な知識の獲得、必要な意志決定能力、必要な行為を実施する能力が必要である。小児看護実践にオレムセルフケア不足理論を取りいれることは、以下の考え方を取り入れることとした。看護師は親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する。親と子どもが主体であり、看護師は計画を共有し支援する（家族参画）。療養支援を看護として意図的に行なう。上記の考え方を看護実践に取り入れることは、社会ニーズに対応する変革と言える。また、意図的に看護を行い振り返ることで、看護師自らが看護の効果を確認できる。オレム理論導入について国内では実践報告が多いが、小児看護領域へのセルフケア不足理論導入の研究はない。

この研究は平成 19 年に小児医療施設の看護管理者から、理論導入について相談を受け始まった。まず導入前実態調査（看護師意識調査）を行い、課題点を明らかにし、教育介入を開始した。19・20 年度は教育介入の課題確認、組織づくり、当初教育内容の構築を行った。教育介入の効果を明らかにするため、19 年度からのデータを分析に使用する。

２．研究の目的

地域小児医療中核施設において、『親のケア能力、子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育・指導力形成のための組織的な教育介入』を行い、その効果を明らかにすることである。

３．研究の方法

１）教育介入:施設看護部・大学教員の合同会議(プロジェクト・オレム推進連絡会議)による組織的な教育介入（平成 19～24 年度）
推進連絡会議（学習会を含む)、集合形式ワークショップ（以下 WS と記す)、部署別 WS など。1 施設 13 部署を対象として教育介入を行った。

２）教育介入の効果検討

教育介入の効果を明らかにするため、19 年度からのデータを分析に使用する。

(1)データ収集　①会議録(会議内での学習会記録を含む)、②WS 録音、③看護師の意識質問紙調査(3 回)、④作成した成果物収集(標準看護計画等)、⑤組織全体への活動報告チラシ

(2)分析　①～⑤のデータについて、ニーズ、課題の検討、教育介入の検討、得られた変化について比較検討し、成果を抽出する。

３）研究者の役割

研究者は施設メンバーとともに教育介入の企画検討、実施、活動のファシリテート、施設中核メンバーの支援を行った。データ収集は研究者が行い、分析も主に研究者が行った。

４）倫理的配慮

研究目的、方法、自由意思での参加、プライバシー尊守を口頭と文書で説明、同意書を得た。研究参加に強制がかからないよう配慮した。研究協力施設、当該大学倫理委員会の承認を得た。

４．研究成果

１）組織への教育介入と作成した成果物

合同会議による組織への教育介入は、合同会議 50 回、教育講演 2 回、集合形式 WS9 回、部署別 WS 87 回（延べ)、参加者 1,265 名（延べ）を実施した。

教育介入により合同プロジェクトで作成した成果物を以下に示す。成果物は、当初理論の理解を促すＷＳの教材であったが、介入が進むにつれ、組織で理論を取り入れた看護過程を展開するための記録様式、ガイドライン、作成ガイド、標準看護計画が作成された。

平成 20 年度：セルフケアの視点から場面の解説、WS 場面集、アセスメント枠。平成 21 年度：WS 事例（場面）の解説、セルフケア情報収集用紙（生活歴)。平成 22 年度：アセスメントの枠組み、家族参画型看護計画ガイドライン、WS 事例：内科・外科生活歴～看護計画までを含む、 標準看護計画作成ガイド（検討版)、標準看護計画案（17)。平成 23 年度：標準看護計画作成ガイド、患者記録再アセスメント用紙、オレム看護計画看護師用書き方見本（生活歴～看護計画)、オレム理論の視点を取り入れた標準看護計画（14)、平成 24 年度オレム理論の視点を取り入れた標準看護計画（89)。

現在、各部署とプロジェクト会議で標準看護計画を作成中で 25 年度電子化予定である。また、この活動は組織内の他委員会も含めた活動に広がり、組織全体での取り組みとなっている。

２）教育介入と変化のプロセス

平成 19～24 年度合同プロジェクト会議録を分析、教育介入とそれによる変化を抽出した。教育介入とそれによる変化は、以下の時期を経て推移した。

(1)「看護実践の課題を認識し、プロジェクトを立ち上げる」

(2)「セルフケア理論が日常の看護とつなが

った」
(3)「視点を変えると子どもの見方が変わり、看護が変わると感じた」
(4)「オレムで看護が変わってきた」
(5)「ワークショップで意識が変わり、部署内に子どもや家族の力を考える人が増えた」
(6)「学習会での事例展開から看護記録にセルフケア理論を取り入れていくメリットが見えた」
(7)「看護記録を変えていく段階」
①問題や目標・計画の表現はどのような表現がよいか悩む
②子ども・家族と目標を共有し、協力し合える計画となるように検討
③各部署で作成した多様な疾患・病期・治療・状況にある子どもと家族のセルフケア能力を支援する看護計画を子どもと家族の目標を考えて標準化

理論導入のための教育介入により、理論が普段の実践とつながり理論の理解を得る段階から、理論を取り入れることで子どもの見方や実践が変わることが実感され、組織の看護記録を変えていく段階に至る変化のプロセスが明らかになった。このプロセスの中で、子どもと家族のセルフケア能力を支援する看護師の教育指導力が形成されつつある。

今後、標準看護計画の全面改訂・電子化により、理論の視点を取り入れた看護計画を、個別のアセスメントに基づき使用し、看護過程を行うことで、さらに子どもと家族のセルフケア能力を支援する看護師の教育指導力が形成されていくと考えられる。

３）教育介入前後の標準看護計画の変化

喘息の子どもへの計画について、従来の標準看護計画とオレム理論を取り入れた標準看護計画を比較し、変化を検討・抽出した。結果、標準看護計画は以下のように変化した。
①「疾患により起こっている問題点に焦点」から「子どもと家族の療養上の必要性に焦点」へ
②「看護師が行う計画」から「子ども・家族が必要なセルフケアをできるよう看護師が支援する（ともに行う）計画」へ

- 子どもの能力（生理的な機能も含めた水・空気・栄養の摂取・調整する能力、状況を伝える力、身体の状態を自覚し、対処する力）を捉え、必要な部分を支援する。
- 子どもと家族の理解に合わせて説明する。
- 病気・症状への対処方法、コントロール方法を提示し、獲得できるように支援する。
- 病気を持った子どもが生活するための家族の日常生活管理方法(ケア能力)の獲得を支援する。

教育介入後の標準看護計画は、疾患からくる問題点から、子ども・家族の療養上の必要性へ焦点が変化し、看護師の行う計画から子ども・家族が必要なセルフケアができるよう看護師が支援する計画に変化していた。今後、個別のアセスメントに基づき、理論を取り入れた標準看護計画を使いこなすことで、看護師の子ども・家族のケア能力獲得を支援する教育指導力が向上すると考える。

４）オレムセルフケア不足理論導入後の意識調査結果について

平成 19 年度より開始した本プロジェクトによる教育介入による効果を明らかにすることを目的に、施設内看護師(340 名)を対象に意識調査(H19,H21,H24)を行い、経年的な比較を行った。その結果、看護するうえでの目的について、「子どもや家族の能力の獲得を支援する」が調査ごとに増加していた。これは、子どもと家族を主体とした看護について討議を重ねる教育介入の成果である。今後、日々の看護実践でセルフケアの視点による看護計画を用いた看護過程の展開より、セルフケア能力向上を支援する看護実践につなげていけると考える。

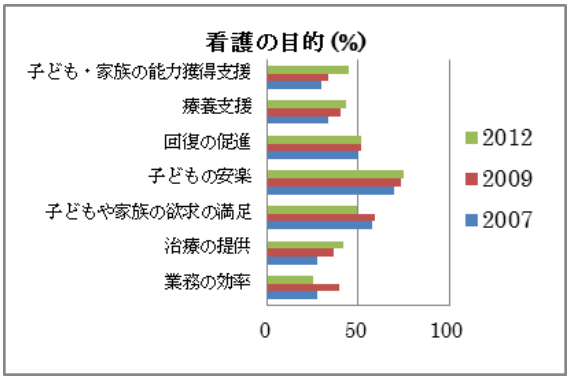

図 1)看護の目的

５）集合形式ワークショップにおける教育介入とその効果

小児医療施設看護部および看護師を対象に集合形式ワークショップ(以下 WS とする)を 5 年間にのべ 9 回開催し、WS ごとに記録の作成、アンケートを配布し回収後、効果を分析した。WS は大きく 2 つの段階の教育介入となった。第 1 段階(1～5 回)は「普段の実践の中にセルフケア能力を高める看護の発見」であり、推進委員からセルフケアを促す看護場面を話題提供し、オレム理論での看護を解説し討議を行った。第 2 段階(6～9 回)は「セルフケア不足理論を使った看護展開」であり、外科・内科部署の小児事例と看護展開モデルを提示し討議を行い、後半はオレム理論の視点を取り入れた標準看護計画を検討した。

結果、第 1 段階ではセルフケア能力を高める看護の理解や日々の実践への結びつけに関して肯定的意見が多く見られ、3 回目以降では、児や家族への関わりで看護実践を変化させており、「セルフケア能力を高める関わ

りの記載を目にする」ことが「とても・少しそう思う」が 63～82%に増加していた(図 2)。

第 2 段階では、「子どもや家族のセルフケア能力を高める援助を取り入れ計画立案している」の「とても・少しある」が 65～86%であり、意図的に看護実践を行えていることが読みとれた(図 3)。

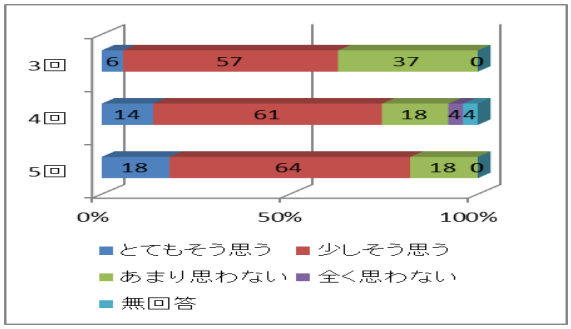

図 2) セルフケア能力を高める関わりの記載を目にする

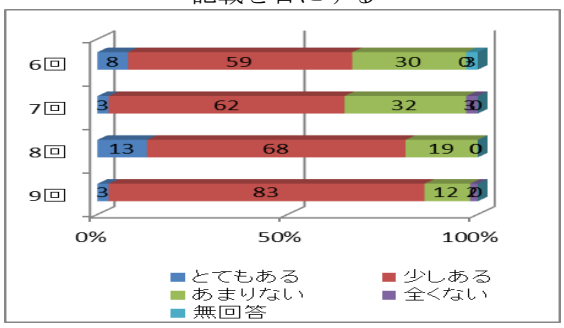

図 3)子どもや家族のセルフケア能力を高める援助を取り入れ計画立案している

アンケートの自由記述を学習成果カテゴリー(行動変化、意識変化、動機づけ、関心・感情喚起、知識理解、課題理解、その他)に沿って分類した。その結果、全過程をとおして、「関心・感情喚起」「動機づけ」が多く抽出された。第 1 段階では、「意識変化」「行動変化」が多く見られていたが、第 2 段階では、「意識変化」が減少し、「課題認識」が増加していた。看護計画作成に向けて、個人の課題から部署の課題へ認識が転換された影響ではないかと考える。

6）部署ごとワークショップにおける教育介入とその効果

平成 20 年～22 年度に開かれた部署ごとワークショップ時の質問紙調査結果の自由記述内容を、学習成果のカテゴリー(行動変化、意識変化、動機づけ、関心・感情喚起、知識理解、課題理解、その他)に沿って分類した。

その結果、図 4 に示すようにカテゴリー「行動変化」の割合は 6%から 28%、48%と増加している。また、「課題理解」も 2%から 13%、18%と増加していた。「行動変化」の段階に至っていると言える。

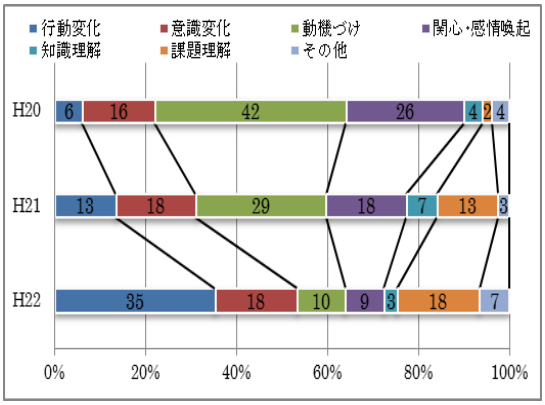

図 4)平成 20～22 年度部署別アンケート自由記述(全体)カテゴリー割合変化

7)まとめ

教育介入により、看護師が理論と実践のつながりを理解し、子どものセルフケア能力・親のケア能力を引き出す看護を意図的に実践する行動変化の段階に至っている。また、施設の看護過程が理論を取り入れた看護過程に転換した。教育介入後の標準看護計画は、疾患中心の問題志向型から子ども・家族のセルフケア/ケア能力獲得へ向けた支援へ変化し、看護師主体の計画から子ども・家族中心の支援へ変化した。今年度、理論を取り入れた記録様式・標準看護計画が電子化される。電子化後、個別のアセスメントに基づき、標準看護計画を個別に合わせて実践することで、さらに子どものセルフケア能力・家族のケア能力獲得を支援する看護実践となり、看護師の教育指導力が向上すると考える。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①近藤美和子、小木曽國子、塚越静江、田代弘子、渡部和子、岩崎鎮枝、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、久﨑悦子、内田裕子、松永幸子、冨永佐織、長場美紀、添田啓子、岡本幸江、三宅玉恵、田村佳士枝、西脇由枝、市川恵美、清水友歌、看護理論の臨床への適用;子どものセルフケア能力・家族のケア能力獲得を支援する看護実践能力向上の取り組み-埼玉県立小児医療センターオレム推進連絡会議の活動-、小児看護、33(13)、2010、pp1728-1733

〔学会発表〕（計 13 件）

①添田啓子、三宅玉恵、岡本幸江、田村佳士枝、西脇由枝、前田浩江、北村麻由美、伊藤美佐子、田代弘子、近藤美和子、渡部和子、齋藤容子、秋山桜子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成―教育介入前

後の標準看護計画の変化―、日本小児看護学会第23回学術集会、H25.7.13、高知市

②岡本幸江、添田啓子、三宅玉恵、田村佳士枝、西脇由枝、前田浩江、北村麻由美、伊藤美佐子、田代弘子、近藤美和子、渡部和子、齋藤容子、秋山桜子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成―オレムセルフケア不足理論導入後の意識調査結果より―、日本小児看護学会第23回学術集会、H25.7.13.高知市

③田村佳士枝、添田啓子、岡本幸江、三宅玉恵、西脇由枝、清水友歌、前田浩江、小木曽國子、塚越静江、近藤美和子、渡部和子、齋藤容子、根岸歳美、冨永佐織、河上佳子、久崎悦子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成－セルフケア理論を用いた各部署推進メンバーの実践の変化―、日本小児看護学会第 22 回学術集会、H24.7.21、盛岡市.

④三宅玉恵、添田啓子、清水友歌、田村佳士枝、岡本幸江、西脇由枝、前田浩江、小木曽國子、塚越静江、近藤美和子、渡部和子、齊藤容子、冨永佐織、根岸歳美、河上佳子、内田悦子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成－H21.22 年度調査結果から捉えたスタッフ自身の看護過程の変化―、日本小児看護学会第22回学術集会、H24.7.21、盛岡市

⑤近藤美和子、齋藤容子、小木曽國子、塚越静江、渡部和子、根岸歳美、冨永佐織、内田悦子、河上佳子、田邊尚子、福地麻貴子、内田誠、添田啓子、三宅玉恵、岡本幸江、田村佳士枝、西脇由枝、清水友歌、前田浩江、子どもと家族のセルフケア能力獲得支援に関する看護実践能力向上の取り組み―「看護過程のガイド」の作成過程―、日本小児看護学会第22回学術集会、H24.7.21、盛岡市

⑥清水友歌、添田啓子、三宅玉恵、岡本幸江、田村佳士枝、西脇由枝、市川恵美、小木曽國子、塚越静江、近藤美和子、渡部和子、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、久崎悦子、曽我貴子、内田祐子、冨永佐織、長場美紀、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成－合同プロジェクトメンバーへの学習会の成果－、日本小児看護学会第 21 回学術集会、H23.7.23、さいたま市

⑦岡本幸江、添田啓子、三宅玉恵、田村佳士枝、西脇由枝、清水友歌、市川恵美、小木曽國子、塚越静江、近藤美和子、渡部和子、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、久崎 悦子、曽我 貴子、内田裕子、冨永佐織、長場美紀、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成―集合形式ワークショップ後アンケート結果より―、日本小児看護学会第21回学術集会、H23.7.23、さいたま市

⑧齋藤容子、近藤美和子、小木曽國子、塚越静江、渡部和子、根岸歳美、内田裕子、冨永佐織、長谷川千晶、長場美紀、久崎悦子、曽我貴子、三宅玉恵、清水友歌、添田啓子、岡本幸江、田村佳士枝、西脇由枝、市川恵美、子どもと家族のセルフケア能力獲得支援に関する看護実践能力向上の取り組み―部署ごとワークショップ2年目の成果―、日本小児看護学会第 21 回学術集会、H23.7.23、さいたま市

⑨田村佳士枝、添田啓子、岡本幸江、三宅玉恵、西脇由枝、市川恵美、清水友歌、田邊尚子、近藤美和子、田代弘子、細渕宏美、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、中島規子、原八重子、林桂子、久崎悦子、曽我貴子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成－集合形式ワークショップの成果－、日本小児看護学会第 20 回学術集会、H22.6.26 神戸市

⑩岡本幸江、添田啓子、三宅玉恵、田村佳士枝、西脇由枝、市川恵美、清水友歌、田邊尚子、近藤美和子、田代弘子、細渕宏実、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、中島規子、原 八重子、林 桂子、久崎 悦子、曽我 貴子.親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成―オレムセルフケア不足理論導入前後の意識調査結果より―.日本小児看護学会第 20 回学術集会、H22.6.26、神戸市

⑪田邊尚子、近藤美和子、田代弘子、細渕宏美、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、中島規子、原 八重子、林 桂子、久崎 悦子、曽我 貴子、添田啓子、岡本幸江、三宅玉恵、田村佳士枝、西脇由枝、市川恵美、清水友歌.子どもと家族のセルフケア推進に関する看護実践能力向上の取り組み―オレム推進連絡会活動の評価を通して―、日本小児看護学会第20回学術集会、H22.6.26、神戸市

⑫岡本幸江、添田啓子、田村佳士枝、三宅玉恵、西脇由枝、市川恵美、清水友歌、野村佳代、田代弘子、近藤美和子、根岸歳美、中島規子、長谷川千晶、齋藤容子、子どもと家族のセルフケア能力向上を支援する看護師の実践能力形成のための教育介入(2)―集合形式ワークショップの成果―、日本小児看護学会第 19 回学術集会、H21.7.18、札幌市

⑬添田啓子、岡本幸江、田村佳士枝、三宅玉恵、西脇由枝、市川恵美、野村佳代、清水友歌、田代弘子、近藤美和子、根岸歳美、

中島規子、長谷川千晶、齋藤容子.子どもと家族のセルフケア能力向上を支援する看護師の実践能力形成のための教育介入(3)―部署ごとワークショップの成果―.日本小児看護学会第 19 回学術集会、H21.7.18、札幌市

５．研究組織

(1)研究代表者
添田　啓子（SOEDA　KEIKO）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
研究者番号：70258903

(2)研究分担者
三宅　玉恵（MIYAKE　TAMAE）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：30523998
岡本　幸江（OKAMOTO　YUKIE）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：70305811
田村　佳士枝（TAMURA　KAJIE）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：60236750
西脇　由枝（NISHIWAKI　YOSHIE）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
（H21:連携研究者）
研究者番号：90132175
市川　恵美（ICHIKAWA　EMI）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教
研究者番号：30457808
（H21:連携研究者、H22:研究分担者）
清水　友歌（SHIMIZU　YUKA）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教
研究者番号：50538915
（H21:連携研究者、H22→H23:研究分担者）
前田　浩江（MAEDA　HIROE）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教
研究者番号：50612595
（H23→H24）

(3)連携研究者
北村　麻由美（KITAMURA　MAYUMI）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教
研究者番号：60644474
（H24）

(4)研究協力者
小木曽　國子（OGISO　KUNIKO）
埼玉県立小児医療センター看護部
（H21→23）
西ヶ谷　正子（NISHIGAYA　MASAKO）
埼玉県立小児医療センター看護部
（H24）
塚越　静江（TSUKAGOSHI　SHIZUE）
埼玉県立小児医療センター看護部
（H21→23）
田代　弘子（TASHIRO　HIROKO）
埼玉県立小児医療センター看護部
（H21・23）
伊藤　美佐子（ITOU　MISAKO）
埼玉県立小児医療センター看護部
（H24）
渡部　和子（WATANABE　KAZUKO）
埼玉県立小児医療センター看護部
（H22→24）
近藤　美和子（KONDOU　MIWAKO）
埼玉県立小児医療センター看護部
齋藤　容子（SAITOU　YOUKO）
埼玉県立小児医療センター看護部